

論文審査の要旨(甲)

申請者領域・分野 氏名	機能再建・再建科学領域 脊椎脊髄病態修復教育研究分野 氏名 附田愛美
指導教授氏名	石橋恭之
論文審査担当者	主 査 花田裕之 副 査 斉藤敦志 副 査 漆舘聡志
(論文題目) Association between injury severity scores and clinical outcomes in patients with traumatic spinal injury in an aging Japanese society (日本における外傷性脊椎・脊髄損傷患者の外傷重症度スコアと臨床成績の関連)	
<p>(論文審査の要旨)</p> <p>【背景】外傷性脊髄損傷について、社会の高齢化に伴い、最も多い受傷機転は交通外傷から転倒に変化し、非骨傷性頸髄損傷の割合が増えている。外傷性脊髄損傷患者のうち多発外傷に伴うものは55%を占め、神経学的回復は多発外傷の有無に因らず、脊髄損傷の重症度に関連していたが、入院期間の延長や日常生活への復帰の遅れが認められるとされる。</p> <p>【対象と方法】多発外傷患者の評価には、外傷重症度スコア (Injury Severity Score: ISS) が用いられているが、現在の日本における ISS と、脊髄損傷患者の臨床成績との関連は明らかではないため、弘前大学医学部附属病院整形外科に2011年1月から2021年12月までに入院した脊椎外傷患者を対象に外傷性脊髄損傷患者のISSと臨床成績との関連性について電子カルテを用いて後ろ向きに調査し、単独外傷群と多発外傷群を比較検討した。評価項目は、年齢、性別、Body Mass Index、多発外傷の有無、後縦靱帯骨化症やびまん性特発性骨増殖症の有無、脊髄損傷高位、ASIA Impairment Scale (AIS)、受傷機転、非骨傷性頸髄損傷の割合、ISS、手術加療の有無、リハビリテーション病院への転院の有無、総入院期間、総リハビリテーション期間、観察期間である。臨床成績は、入院時および最終観察時におけるISSとAIS、ASIA motor score、Barthel Index、EuroQol 5 dimensions 5-level (EQ5d)との相関、居住地(自宅、介護施設、療養型病棟)、職場復帰との関連を調査した。</p> <p>【結果】多発外傷の割合は16.8%であり、単独損傷群と多発外傷群の比較では、受傷機転、脊椎手術に至った割合に差は認めず、頸髄損傷の割合は単独損傷群で有意に多く、胸髄損傷は多発外傷群で有意に多かった。ISSは入院時および最終観察時の日常生活能力 (Barthel Index)、麻痺の重症度 (ASIA motor score)、最終観察時のQOL(EQ5d) と負の相関を認めた。ISSが14未満の患者で自宅復帰を、19未満で職場復帰を認めた。従って、多発外傷の有無に関わらず、ISSが外傷性脊髄損傷後の臨床成績を予測するツールの一つとなりうる。</p> <p>本論文は弘前大学医学部附属病院医療圏における外傷性脊髄損傷について単独損傷と多発外傷に伴うものに分けて詳細に検討し、外傷重症度スコアと外傷性脊髄損傷の予後の関係について初めて明らかにしており、学位授与に値する。</p>	
公表雑誌等名	Medicine、2023 Sep 29;102(39):e35369.